

# 日本近代における「視覚障害者」の処遇をめぐって

生 瀬 克 己\*

## 1. はじめに

わが国の歴史のなかで、その心身の障害とともに生きてきた者たちのことを考えるとき、その大要は身体障害者・知的障害者・精神障害者に分けられて、そのそれぞれに固有の課題をかかえてきた。そのことはそれとして論じなければならないのであるが、身体障害者のなかでも、わが国に特徴的なところがあったことも忘れるわけにはいかない。同じく身体障害者であっても、いわゆる「盲人」の場合には、先行の幕藩制社会のなかで彼らのための当道座が一応は確立されていて、音楽関係であったにせよ、鍼灸やマッサージといった医療関係であったにせよ、さらには当道座の高位者を中心に営まれていた座頭金と呼ばれた貸金業であったにせよ、それなりの「生業」を手にする<sup>なりわい</sup>ことはできた。その意味では、明治維新によって当道座が廃止されて「生業の道」を失くしたわけで、わが国の障害者のなかでは、いわゆる「盲人」が明治維新の最も直接的な影響を受けた存在だと言えるかもしれない。

それにくらべると、いわゆる「盲人」以外の身体障害者に、そのような先行的な条件はなかった。その意味では、明治維新といういわば動乱・混乱期の一般的な影響はどの障害者も受けざるをえなかったであろうけれども、それ以上のことはなかったともいえるかもしれない。

後に詳述するが、いわゆる「盲人」の近代以降の歴史を考えるについても、この先行社会における、彼らの「生業」のあり方と深く関係していた。

さらに、「時代」が近代に移行することで、「障

害」に関する新たな認識が生まれてもくる。いわゆる「盲人」の場合には、近代にいたって「全盲」と「弱視」といったように、その「障害の程度」に応じて分けて理解されるようになってくる。したがって、本稿では、このような「全盲」と「弱視」といった理解をひとまとめにするものとして「視覚障害者」という用語を用いることにする。

そのようななかで、「治療」とか「予防」ということを念頭において、「障害」のことが理解されるようになってくる。近代社会におけるこのような特徴からすれば、前近代のように「盲人」「盲目」といったように、一律にひとまとめにして理解しなくなったかわりに、「障害」をもたないひとの身体を基準にして（いわば「完全」な身体と考えて）、その「基準」からいかに乖離しているかといった形で「障害」のことが考えられるようになっていく。そして、この「完全な身体からの乖離」という尺度にもとずいて、その「障害ある身体」をいかに「完全な身体」に近づけるか（いわば「治療」）、あるいはいかにして「完全なる身体」をそこなわせないか（いわば「予防」）という認識にもつながっていく。

わが国近代の「視覚障害者」のことを考えてみると、ひとつは先行の幕藩制社会で獲得していた「生業獲得の方途」に強く影響されながら、他方で、「障害」を「予防」し、「治療」できることをベターと考えることに徐々につつみこまれていき、「経済競争」の荒波に翻弄されていった。その背後には、社会保障や社会福祉からの支援がきわめて不十分であったことと、当時の言葉でいえば、「独立自営」、すなわち自らの労働で生活を立て、自らの力のみで社会生活のすべてを成り立たせていくという障害者観が立ちあらわれてくる。

\* 本学文学部

## 2. いわゆる明治維新の影響

幕藩制社会における当道座は、京都におかれた職屋敷において自治・統括されていた。1871（明治4）年に、この職屋敷は廃止された。これで当道座は成り立たなくなってしまった。明治維新の影響はそれだけではなかった。もうひとつの大きな影響は、1874（明治7）年8月18日の医制発布であった。この医制は、直接には、伝染病を予防するための最初の全国的法制として重要な意味をもつものであるが、その53条に、医師は「鍼灸治ヲ業トスル者ハ内外科医ノ差図ヲ受ルニ非サレハ施術スヘカラス、若シ私カニ其術ヲ行ヒ、或ハ方薬ヲ与フル者ハ其業ヲ禁シ、科ノ軽重ニ応シテ処分アルヘシ」<sup>1)</sup>と規定されていたからには、鍼灸業にたずさわる視覚障害者たちに影響しないではおかなかったであろう。とりあえずは、江戸期の杉山和一で有名な鍼医たちは、この医制発布によって、少なくとも、制度的には、西洋医家たちの膝下におかれることになったことだけは確かである。

さらに、1885（明治18）年3月25日、「鍼灸術営業差許方」が発令され、「鍼灸術営業者之儀ハ従来開業之者並ニ新規開業セントスル者ハ自今出願セシメ其修業履歴ヲ検シ相当ト認ムルトキハ差許不苦、其取締方之儀ハ便宜相設可申、此旨相達候事」<sup>2)</sup>と定められた。さらに、1911（明治44）年8月14日に「按摩術営業取締規則」<sup>3)</sup>「鍼術、灸術営業取締規則」<sup>4)</sup>が制定されて、鍼灸業・あんま業に関する統一的な制度が実施された。

「按摩術営業取締規則」・「鍼術、灸術営業取締規則」について簡単に説明しておく、(ア)営業をなすには、地方長官の行う試験に合格するか、または地方長官の指定する学校、もしくは講習所を卒業して、地方長官の免許鑑札を受けること、(イ)一定の欠格事由のある者には免許鑑札を交付しないこと、(ウ)営業に関する広告制度を設

けたこと、(エ)業務停止などの行政処分について定めたこと、(オ)従来交付されていた免許鑑札の取扱いを両規則に基づくものとみなしたというような内容であった<sup>5)</sup>。

なお、「按摩術営業取締規則」では、試験が甲種・乙種の二種にわけられ、乙種については視覚障害者だけが受験できるものとし、視覚障害者を優遇するとの観点から、乙種試験の内容を簡易なものにするとしている。さらに、各地の状況如何によっては、当分の間は、試験をおこなわずに免許をあたえることができるものとしている。そして、このあんま業に関する制度の制定過程においては、1909（明治42）年の第25議会に、あんま業を視覚障害者の専業とすることを求める請願がおこなわれたことが知られている<sup>6)</sup>が、このあんま業を視覚障害者の専業にしようという運動は、この国会請願よりも、もう少し早い時期から開始され、戦前昭和期を通じて主張されつづけたようである。このことについても後に述べることにする。

## 3. 鍼灸業と「鍼灸按摩営業取締規則」

その後「鍼灸按摩営業取締規則」によって、鍼灸按摩指定学校が1912（明治45・大正元）年に全国で15校さだめられた<sup>7)</sup>。いま、この15校を地域別にしめすと、次頁の表のようになる。

1911（明治44）年に内務省からの奨励助成金交付を受けたときの記録<sup>8)</sup>によると、このころの視覚障害者の教育機関としては次頁右側の表

5) 厚生省五十年史編纂委員会編『厚生省五十年史』記述篇、163頁。

6) 同上書、163頁。

7) 「鍼灸按摩校指定」（『人道』89）14頁。このときに指定された学校は東京私立築地盲人技芸学校、同官立盲啞学校、京都私立盲人技芸学校、大阪私立盲啞学校、岐阜私立訓盲院、茨城私立盲啞学校、北海道財団法人小樽盲啞学校、島根私立松江盲啞学校、長崎私立盲啞学校、福島岩城訓蒙院、山口私立下関博愛盲啞学校、新潟私立盲啞学校、同私立長岡盲啞学校、同私立長岡盲啞学校、同私立中越盲啞学校、同私立高田訓蒙院である。

8) 『感化救済事業概要・第三回奨励及助成感化救済事業一斑』。本稿では、社会福祉調査研究会編『戦前期・社会事業史料集成』第1巻（日本図書センター、1985）所収本1-10頁を使用している。

1) 厚生省五十年史編纂委員会編『厚生省五十年史』記述篇、162頁。

2) 同上書、163頁。

3) 同上書、163頁。

4) 同上書、163頁。

1912年の地域別鍼灸按摩指定学校

府 県 名	学 校 数
北海道	1
福島	1
新潟	4
東京	2
茨城	1
岐阜	1
京都	1
大阪	1
島根	1
山口	1
長崎	1
合 計	15

所 在 地	名 称
東京	日本盲人協会
同	東京盲人教育会
新潟	中越盲啞学校
同	長岡盲啞学校
同	新潟盲啞学校
同	高田訓蒙学校
愛知	私立豊橋盲啞学校
長野	長野盲啞学校
福島	福島訓盲学校
富山	富山訓盲院
香川	香川県私立盲啞学校
長崎	長崎盲啞学校
鹿児島	鹿児島盲啞学校
同	鹿児島慈恵盲啞学校

「鍼灸按摩校指定」（『人道』89）より作成

のような14団体の名称があがっている。1912年の鍼灸按摩指定学校と完全に一致しているというわけではないが、新潟県の場合などは4校とも一致している。こうした事情からすれば、視覚障害者の教育のなかで、あんま業が大きな位置をしめていたであろうことは予想できるが、どこも、だれもが一律にあんま業をめざしたわけではなさそうである。

そうした見方をすれば、さきの内務省の奨励助成金交付記録に、

（前略）幸にして近来は盲人教育の事業も漸次各地に設立せられ、何れも適応の教習を受けて、既に独立自営の民となるに至りしものも亦固より少しとせず、文明の恩沢真に大なりと謂ふへし。殊に新潟県の如き県内四五箇所に於て、既に此事業の開設せらるゝを見る。天皇陛下か曩きに明治十一年を以て同県下に御巡幸ありし際、県下には失明者頗る多しと聞召され、特に千円の御下賜金ありし事あり。爾来新潟県に在ては久しく之を利殖し来り、其額今や五千二百五十円に達したりといふ。念ふに訓盲学校の県下に多く設立せらるゝは真に陛下の御盛旨を奉載したる結果なるべく、殊に県に於ても各訓盲学校に対し夫れ夫れ補助金を支出する如きは、是れ亦其趣旨に外ならず。独り新潟県のみならず、此種事業の著

しきもの、各地方に散在するの観あり、日本盲人協会、東京盲人教育協会を始め、岐阜県訓盲院の如き、豊橋盲啞学校の如き、皆見るに足るべきものあり。其他多くの盲啞学校に在りては、校長以下一般の教師は、何れも身を傾けて盲啞者の同情者となり、保護者となり、又之か慰安者となり、友となり、師となりて、懇切に之を指導しつゝあり。岐阜訓盲院の院長森巻耳の如きは、曾て岐阜中学校の教諭たりしも、中年にして其明を失し、爾来残余の生涯を挙げて、之を盲人の教育に費すことゝし、自己の俸給全部をは、総て学校に寄附し、自己の家族は、息男の送金、其他に依りて生計を立てつゝあり。日本盲人協会々長歩兵中佐山岡熊次の如きは、旅順の戦役に際し、不幸にして失明の身となるや、自ら進んで同協会を組織し、全国の盲人の為に、其生涯を捧げんとせり。（後略）<sup>9)</sup>

とあって、全国各地の篤志家たちの手で教育に取り組まれていった様子をうかがわせている。ここでは、「独立自営の民」とすること、すなわち＜経済的自立＞と＜社会的・日常的自立＞をめざすことが第一の特徴であろうし、彼ら指導者が当の視覚障害者に対して、「師」とであるとともに、「保護者」「同情者」「慰安者」、すなわち

9) 『感化救済事業概要・第三回奨励及助成感化救済事業一斑』、20-21頁。

彼ら視覚障害者の仲間・協力者としてかかわっていることが強調されていることに注目しておきたい。この時代が＜障害者の所得保障＞などといったことは思いもつかないことを念頭におくならば、この心情が強調されている分だけ、あるいは、＜生業の獲得＞ということよりも先に、こうした心情的共感の部分が強調されるということそれ自体が、社会全般のなかでは、当の視覚障害者の＜孤立＞せざるを得ないような状況を物語っているといえるかもしれない。

それにしても、日本近代におけるいわゆる障害児教育への取組は早かった。明治政府の要職につき、幕末に伊藤博文とともにイギリスにおもむき、明治初期に欧州渡航の経験をもつ山尾庸三が太政官に対して盲学校・聾学校の建設に関する建白書を提出した<sup>10)</sup>のは1971（明治4）年9月のことであった。中村正直・古川正雄・岸田吟香に加えて宣教師のボルシャルト等が＜盲人の教導＞を目的に1875（明治8）年に組織したのが楽善会であった。この楽善会設立の翌年の1876（明治9）年には、東京訓盲院の設立許可があたえられている（ただし、活動開始は1880・明治13年、後の文部省直轄の東京盲啞院）。同じく1878（明治11）年には、京都市盲啞院が設立され、1889（明治22）年には、京都市立盲啞院になっている。

これらの取り組みでは、人間の生活を「独立自営して他人の手に縋ることなきは、人として最も貴ふ所のものなり」<sup>11)</sup>と位置づけたうえで、個々の障害者たちは「世には不具廃疾の為め事意に任せ得ざるものあり、盲聾瘖啞の如きは其なり。随ひて懇切に指導し保護をなすにあらされは、彼等は總て終生天の恵に浴することを得ざるへし」<sup>12)</sup>と考えられた。それゆえ、京都市立盲啞院などでは、30校の小学校に付設されて「各々盲聾瘖啞の為に最も有用の学課と実習とを授けて、此等救済の設備略々見るべき

ものあり」<sup>13)</sup>というような実践性の強い教育がなされた。

これほど明確に＜独立自営の生活の確保＞ということがうたわれ、そのための＜指導＞ということを出したからには、日本盲人協会が「盲人ノ和親協同ヲ旨トシ独立自営ノ道ヲ講シ以テ盲人相互ノ幸福ヲ増進スルヲ目的トス、其方法トシテ点字図書・新聞・雑誌等ヲ出版シ点字図書館ヲ設立シテ盲人ノ知識ヲ進メ盲人罹災者ヲ救済シ失職者ニ職業ヲ授ケ時々技芸ニ関スル講和会ヲ開催シ盲人ノ幸福ヲ増進センコトヲ期セリ」<sup>14)</sup>ということであったとしても、その一方で、東京盲人教育会が「東京府下在住ノ盲人ニ対シ鍼按其他必要ナル知識ヲ授ケ独立自営ノ基礎ヲ鞏固ナラシムルヲ以テ目的トス」<sup>15)</sup>というような形で具体的に＜生業獲得＞をめざしたというのは当然のことであつたろう。あるいは、森巻耳が設立した岐阜訓盲院が「普通教育を授け、以て独立自営の人たらしめんとするを目的とす」<sup>16)</sup>といしたうえで、より具体的には「特に『マッサージ』の練習をも為さしめ、更に進んては、盲生に適切なる音曲をも併せ修得せしめんとす」<sup>17)</sup>というような教育をほどこしたのも、その事情は同様であつたことだろう。

このように考えてくると、近代の視覚障害者の生業獲得にとって、いわゆるあんま業と琴・三味線のような音楽関係が大きな位置をしめていたことは確かなことだが、この江戸幕藩体制以来の伝統的生業以外のものをめざすところもあつた。たとえば、長野県盲啞学校の場合は、「盲啞者に普通教育を授くるの外、手工、裁縫等の技をも教授せり」として、「封筒」「燐寸箱」等を例示している<sup>18)</sup>。

13) 『我国に於ける慈善救済事業』（明治41年、前掲『戦前期・社会事業史料集成』第1巻所収）29頁。

14) 内務省地方局編『奨励ヲ受ケタル救済事業一覧』（明治43年6月、前掲『戦前期・社会事業史料集成』第1巻所収）38頁。

15) 同上書、36頁。

16) 内務省地方局編『感化救済小観』（明治41年、前掲『戦前期・社会事業史料集成』第1巻所収）27頁。

17) 同上書、27頁。

18) 同上書、30頁。

10) 教育史編纂会編『明治以降教育制度発達史』参照のこと。

11) 『我国に於ける慈善救済事業』（明治41年、前掲『戦前期・社会事業史料集成』第1巻所収）27頁。

12) 同上書、27頁。

わが国近代の障害者を考えるとき、その考え方の根底に自力での〈独立〉〈自営〉ということがはっきりとあった。このような考え方を基本にするかぎり、ひとりひとりの障害者がその暮らしを成り立たせうる〈生業〉を獲得しないかぎり、その目的を達成しえないことになる。それゆえ、視覚障害者の場合には、先行の時代以来、すでに実績のあるあんま業や琴・三味線の師匠といった職業によりかからざるをえなかった。さきに、例示した長野県盲啞学校のような事例がほかにもあったことだろうが、それらの生業が、それまでの伝統的な生業を凌駕するのは容易なことではなかっただろう。そこで、つぎに、その生業と所得・収入のことを検討することにしよう。

#### 4. 視覚障害者の所得をめぐる

1891（明治24）年12月1日、石井亮一は濃尾大地震のために〈孤児〉となった子どもを救済するために〈孤女学園〉を開設する。この学園を1896（明治29）に〈滝乃川学園〉と改称して、わが国で最初の知的障害児の教育を始めている。これよりさかのぼって、1875（明治7）年7月には、京都の南禅寺の境内に、精神障害者のための最初の公立の病院といわれる〈癲狂院〉が設立されている。同じこの年、京都府待賢宇学校の訓導であった古河太四郎が、この学校内に教場を開設して、独自の手話法による〈ろう教育〉を開始している。1903（明治36）年3月、伊沢修二が東京に楽石社を設立して、ろう者の発音指導を開始している。このように、近代になってそれぞれの障害者への〈処遇〉が考えられていった。そして、身体障害者の場合には、〈盲〉と〈ろう〉が一緒にされて取り込まれることが多かった。

1903（明治36）年5月に開催された全国慈善大会（於・大阪）で、文部視学官の寺田勇吉が、わが国の実情について、

（前略）譬へば盲学校、啞学校、是等は多少官公立の学校もないではありませぬが、偶に在りました所で、盲啞と云ふやうな者は其の教育の方法が全然異なつて居る、然るに之れ

を一の学校に入れて齊しく教育をして居ると云ふことは甚だ不完全なる次第である、尤も亜米利加（アメリカ）に於いては盲啞学校にして一緒になつて居る所もないではありませぬが、欧羅巴（ヨーロッパ）諸国就中教育の行届いて居る独逸（ドイツ）仏蘭西（フランス）に至つて見ると殆んど一校長の下に盲啞の学校を管理して居る所はない、（後略）<sup>19)</sup>

と語っていることからわかるように、「盲教育」と「聾教育」を分離するべきだとする意見はあった。しかし、現実には、1909（明治42）年4月に、東京盲学校が新設されて、翌年の1910（明治43）年4月に、東京盲啞学校が東京聾啞学校と改称されるまでは、両者は共に教育されていた。しかし、両者の収入には、かなり大きな格差があったようである。

筆者が入手することのできた両者の収入に関する資料は、1903（明治36）年の東京盲啞学校の卒業生の動向をつたえたもの<sup>20)</sup>がとりあえずは最も古い。これを視覚障害者とうろ者にわけて、それぞれの月収額が明示されている職業だけを表示すると、次頁上段の二表のようになる（なお、月収額の明示されていない仕事は「その他」として各表の末尾に記した）。同じ頃の東京府下全体の職業構成も知りうる<sup>21)</sup>。これを表示すると、次頁下段の三つの表のようなことになる。

まずは、1904（明治37）年末の東京府下の数値をみると、府下に1,657人の視覚障害者がいて、それは人口千人に1人にあたるとしている。これらのうち、「自活者」とされているのが1,476人（89.1%）であって、残りの181人（10.9%）が他人に養われているということになる。「被扶養者」とされている人たちのうち、75%以上にあたる人びとは「親族・故旧」に養われていて、東京市養育院に代表されるような生活施設にいる人は20%未満の34人にすぎない。こうしたことからすると、最後に頼るところとなると、や

19) ト部豊次郎『全国慈善大会史』（明治36、前掲『戦前期・社会事業史料集成』第1巻所収）52頁。

20) 「東京盲啞学校卒業式」（『婦人と子ども』3-6、明治36年6月）70頁。

21) 「東京府下の盲人と其職業」（『東京市養育院月報』50、明治38年4月）6-7頁。

## 視力障害の卒業後の動向（明治36年）

仕事の種類	人数	最高月収	最低月収	平均月収
鍼按営業	24 人	5.0 円	0.6 円	1.8 円
訓盲教員	8	5.0	0.8	2.3
病院按摩手	7	6.7	1.7	3.7
琴師匠	7	5.0	3.0	3.8
その他	21	—	—	—
合計	67	—	—	—

注)

その他の内訳

鍼按科専修 7 人, 弾琴科温習 2 人, 家務(専業主婦) 2 人, 尋常科専修 1 人, 病氣 1 人, 死亡 4 人, 不詳 4 人。

## ろう者の卒業後の動向（明治36年）

仕事の種類	人数	最高月収	最低月収	平均月収
写真師	3 人	—円	—円	4.2 円
風琴工	2	1.6	1.6	1.6
聾啞教員	2	1.5	0.5	1.0
友禅絵師	2	1.4	1.0	1.2
その他	64	—	—	—
合計	73	—	—	—

注)

その他の内訳

絵画専修14人, 裁縫専修10人, 家事手伝 7 人, 農業 4 人, 家務 3 人, 仕立職 3 人, 指物師 2 人, 彫刻師 2 人, 蒔絵師 1 人, 染織学校雇 1 人, 陶画師 1 人, 印刻師 1 人, 足袋職 1 人 靴工 1 人, 未定 1 人, 不詳 2 人, 病氣 4 人, 死亡 6 人。

## 1904（明治37）年末の視覚障害者生活と職業（東京府下）

総 数	1,657 人（人口 1,000 人に 1 人）
内 自活者	1,476 (89.1%)
被扶養者	181 (10.9%)

## 自活者の職業構成

あんま	730 人 (49.5%)
鍼術	188 (12.7)
歌舞音曲	86 ( 5.8)
灸点	24 ( 1.6)
落語	1 ( 0.1)
その他	42 ( 2.9)
無職	405 (27.4)
合計	1,476 (100)

## 被扶養者を扶養する者

親族故旧の扶助	137 人 (75.7%)
養育院等	34 (18.8)
その他	10 ( 5.5)
合計	181 (100)

1908（明治41年）年の視覚障害者の収入

仕事の種類	人数	最高月収	最低月収	平均月収
琴師匠	5人	10円	1円	4.2円
病院按摩	10	12	1.5	3.7
鍼治按摩	16	10	5.0	3.0
盲教員	20	6-7	0.8	2.1

はり、親族・知人しかなかったということであろうか。

他方、「自活者」とされている方も相当に特徴的である。第一の特徴は「あんま」「鍼術」「灸点」の三職をあわせて942人（63.8%）を占め、これに歌舞音曲86人（5.8%）をくわえると、全体の約70%が、江戸期以来の伝統的な職業に従事していたことになる。第二の論点は「無職」405人（27.4%）が「自活者」とされている点である。常識的に考えれば、無職のままで自活することは困難であろうから、頼るべき人とてなくて、不特定の人びとからの＜施し＞によって露命をつないでいたのかもしれない。このように考えると、なんとか自活できていたのは「無職」405人（27.4%）を差し引いた1,071人（64.4%）であったということになる。

ところで、さきにかかげた1903（明治36）年の月収調査をみると、同じ「はり・あんま」であっても、「鍼按営業」（最高5円、最低60銭、平均1円80銭）と「病院按摩手」（最高6円70銭、最低1円70銭、平均3円70銭）では、かなりの収入差があったことになる。さらに、「鍼按営業」「病院按摩手」ともに、最高月収と最低月収の差もかなり大きい。さらに、明治になって現れてきた「訓盲教員」（最高5円、最低80銭、平均2円30銭）も、最高月収は「鍼按営業」と変わらない。ただし、「鍼按営業」よりも平均月収がかなり高いから、その意味での安定性はあったのかもしれない。その意味では、「琴師匠」の場合が最高月収（5円）・最低月収（3円）・平均月収（3円80銭）の差が他の職よりは小さい。

それにくらべると、ろう者の月収はかなり低いことになる。この資料では、「仕立職」「指物師」「彫刻師」「蒔絵師」「陶画師」「印刻師」「足袋職」「靴工」というような当然ながしかの収

1908（明治41年）年のろう者の収入

仕事の種類	人数	最高月収	最低月収	平均月収
木工	5人	3円	1.4円	2.2円
絵画及写真	6	3.3	0.5	1.7
啞教員	10	2.2	0.4	1.0
裁縫及洗濯	4	1.5	0.3	0.6

入が得られたはずの職に数値の記載がないから、もしかすると、この表から全体的な特徴づけはしない方がよいのかもしれない。そうだとすれば、ろう者の場合には、全体として、いわゆる職人関係の仕事が多かったようであるという特徴の指摘にとどめるべきかもしれない。

そうした留保を残したうえでのことではあるが、ここでの数値のかぎりでは、[写真師]（平均4円20銭）は別であるが、[風琴工]（最高・最低・平均1円60銭）、[友染絵師]（最高1円40銭、最低1円、平均1円20銭）となっていて、視覚障害者の場合の四分の一から五分の一の水準であったことになる。さらに、「聾啞教員」（最高1円50銭、最低50銭、平均1円）のような新しい職業の場合も、視覚障害者にくらべてその月収水準はかなり低い。

上述の数値を明治30年代半ば前後のものと考えると、これから数年をへた1908（明治41）の数値<sup>22)</sup>をみると、ちょっとした変化がみられる。とりあえず、1908（明治41）年の職種と数値をそのまま表示すると、上の二つの表のようになる。

この資料も東京盲啞学校の卒業生のものであることは確かだが、この金額が月額なのかどうかの記載がない。その意味では、いささかの不安の残る資料だが、明治41年度の数値であると明記されているから、41年度卒業生の数値であることは確かなこととして、一応は月収と考えておきたい。

とりあえずは、この資料をこのまま信頼するとすれば<sup>23)</sup>、さきの1903（明治36）の金額にく

22) 「盲啞卒業生の就職」（『児童研究』13-3、明治42年9月）111-112頁。

23) この「盲啞卒業生の就職」という資料は、『人道』49号（明治42年5月5日）にも同様に掲載されていて、数値の印刷ミスとも考えにくい。

## 明治末期頃の給与

	明治 39(1906)	同 40(1907)	同 41(1908)	同 42(1909)	同 43(1910)	同 44(1911)
総理大臣	一円	一円	一円	一円	1,000 円	一円
銀行員	35	—	35	—	40	40
公務員	—	50	—	—	—	55
巡査	12	—	—	—	—	—
小学教員	10-13	—	—	—	—	—
大工	—	1	—	—	—	—
日雇	0.24	0.49	0.53	—	—	0.56

注)

- ①銀行員・公務員・巡査・小学校教員は初任給。
- ②銀行員は大学卒業者の場合で第一銀行の水準。
- ③公務員は高等文官試験に合格した高等官の給与。
- ④小学教員は明治33 (1900) 年の数字である。
- ⑤大工の手間賃は東京における 1 人 1 日当たりの年平均手間賃。
- ⑥全国における 1 人 1 日当たりの年平均賃金。

らべて、最高月収・最低月収ともに、その金額は倍増している。この変化は日露戦争後の経済変動の結果として一応は納得するとしても、それだけかどうかは今後の研究に待つ必要がある。上の「明治末期頃の給与」<sup>24)</sup>にあるように、視覚障害者の月収は、その最高額を基準にすれば、銀行員・公務員の四分の一から五分の一の範囲、巡査・小学校教員よりいくらか劣るといったところではなかっただろうかと思える。ただし、銀行員は戦前社会の大学卒業者の初任給であるし、公務員は高等文官試験に合格した人たちの初任給であるから、いわばトップ・エリートたちである。その意味では、戦前期のわが国にあって、巡査・小学校教員は上位の中流に属すると考えられるから、最高月収を獲得している視覚障害者はそれに近い水準であったのかもしれない。ただし、最低月収との格差はかなり大きいし、他の障害者、たとえば、ろう者との格差も相当にあったことになる。さらに、視覚障害者とうろう者の月収格差も、以前にもまして大きくなっている。それはそれとして、この1908 (明治41) 年度の資料に「右の表にては盲生の如きは其収入の点より見るも、普通官私立専門学校卒業生に優れるあり」<sup>25)</sup>との注記があるから、

この時期の視覚障害者、とくに東京盲啞学校の卒業生の月収額がかなり改善・上昇したと考えてもよいだろう。

以上のような明治30年代後半以降における視覚障害者の経済状況の改善ということを念頭においたうえで、1911 (明治44) 年8月14日の「按摩術営業取締規則」制定という現実を考えてみたい。

東京盲啞学校長の小西信八が、自分の子どもを盲啞学校に通わせれば「彼<sup>あそこ</sup>へ遣<sup>なぐ</sup>れば擲<sup>なぐ</sup>られやうとか軽蔑せらるゝとか云ふことはない」<sup>26)</sup>、あるいは「今日では、盲啞の様な者を恐ろしいものと云ふ感じはなからうが穢<sup>けが</sup>らしいものと云ふ人はまだあります」<sup>27)</sup>と、明治37 (1904) 年の時点で訴えていることから明らかなように、当時、視覚障害者もうろう者もきびしい差別にさらされていた。そうであってみれば、なおのこと、視覚障害者にとっては、この頃以後の経済状況の改善という現実は重大であったにちがいない。

1905 (明治38) 年頃に、内務省衛生局はすでに「盲人調査」を実施するとして、各府県に「調査終了の上は盲人に対する特別保護必要の有無及び按摩鍼術等に依つて完全に之れが救済を為

24) 週刊朝日編『値段史年表——明治・大正・昭和』(朝日新聞社、昭和63刊)より作成。

25) 前掲「盲啞卒業生の就職」112頁。

26) 小西信八「盲啞教育の起源」(『婦人と子ども』4-5、明治37年5月)49頁。

27) 同上、52頁。



し得べき否や等の点を研究し、其結果法律若しくは行政命令を以て相当の取締をなすべく、又た万一取締をなすの必要なしとするも、衛生局は各府県に向け盲人の職業に就ては成るべく便宜を与へられたき旨<sup>28)</sup>というようなことの照会を計画している。ちょうど同じ頃に、内務省は「今回の戦役に名誉の奮闘をなし負傷失明せる者の数は士卒を通じて百五十余名に達する由なるが、此程内務省は此等失明軍人の救済に関して東京盲啞学校長小西信八氏に交渉し、該失明者中生活困難なる者に対しては、同校に収容して『マッサージ』術を教授し以て独立の生活法を授くることに決し、希望者には其所在地より東京までの旅費を給するは勿論、就学中も相当の補助を与ふることゝし<sup>29)</sup>」というようなことがおこなわれていて、日露戦争の後をうけての戦争障害者への対処という問題が大きく作用していたことだろう。しかし、それにしても、このことが視覚障害者とその関係者の間では、いわば鍼按摩業を＜視覚障害者の仕事＞としてさらなる確立をはかるチャンスと感ぜられたのではないだろうか。同じ年の4月18日、第21議会に「鍼按摩術を盲人の専門特許たらしめん<sup>30)</sup>」ことを目的に＜盲人特別保護建議案＞が出されたのをうけて、東京神田の青年会館に千人の聴衆を集めて＜全国盲人大会＞が開催されている。そして、この場で「鍼按摩業者一般衛生法励行を期する事<sup>31)</sup>」「教育を奨励し日新の医学を修む可き事<sup>32)</sup>」「專業案に各地共同運動を開始する事<sup>33)</sup>」の三点が議事にあげられている。この大会では、当時、盲人医学協会会長であった千葉勝太郎が開会の辞を述べているから、あるいは、視覚障害者自身の取り組みであったのかもしれない。

28) 「盲人保護の方針」(『東京市養育院月報』49, 明治38年3月) 6頁。

29) 「戦役失明者の救護」(同上誌58, 明治38年12月) 6頁。

30) 「全国盲人大会」(『人道』1-2, 明治38年6月15日) 13頁。

31) 同上書, 13頁。

32) 同上書, 13頁。

33) 同上書, 13頁。

いずれにしても、こうした大会はその後にも計画されている。たとえば、(明治43)年4月23日、東京両国の国技館で「本期議会に現はれたる盲人按摩専門問題に就き盲人大会を開催し<sup>34)</sup>」というようなことが考えられている。さらに、(大正3)年には「薄俸なる盲人救済の目的にて鍼按摩業を盲人の専門にせよとの要求は漸次世人の注意を惹き来れるが旧臘板垣伯邸に於て各派代議士有志会を開き例年同様請願を為す外別に法律案を提出するに決し<sup>35)</sup>」というようなことがあったりしている。あるいは、一定のところまで、運動は進展していたのかもしれない<sup>36)</sup>。

## 5. 地域社会の変容をめぐって

明治の末期から大正の初期くらいの時期には、あんま業に従事する視覚障害者のなかには、かなり安定した生活を獲得している人もいたようである。たとえば、大正初期頃のこととして、伊豆の修善寺で働く65歳の男性の暮らしぶりが記録されている<sup>37)</sup>。この男性は25歳で失明した。現在は妻と寡婦となった34歳の娘と孫の4人暮らしである。この人はこのルポの筆者に「一家四人が喜樂に暮せる丈の財産がある」と語ったという。それを聞いたルポの筆者は「数千円の金は稼ぎ蓄めたと見える」と判断している。

青年期に失明したこの男性は＜あんま業＞という技術をどのようにして獲得したのだろうか。彼の語るところは、

(前略) 中年に盲目になってえらい困て親類や友達に是から先どうして暮したものかと相談した所が、貧乏百姓が眼が見へなくなったんだから按摩を習て修善寺へでも行て稼いだ

34) 「盲人大会」(『人道』61, 明治43年5月5日) 13頁。

35) 「盲人大会の計画」(『九恵』大正3年2月) 13頁。

36) このような「盲人大会」に関連すると思われる資料が雑誌『社会事業彙報』に、「筑豊盲人大会」(昭和3年12月), 「全国盲人大会」(昭和4年1月), 「全国盲人大会概況」(昭和6年4月), 「関東盲人大会概況」(昭和7年5月), 「盲人職業保障に関する法律案」(昭和8年12月)と存在するが、いまのところ雑誌『社会事業彙報』を入手できない。

37) 愚仏「按摩」(『九恵』144, 大正2年1月) 9-11頁。

らよかんべいと云ふから其気になって幸に近所に按摩を知った人があったから其人に頼で稽古して廿六の歳に此所に来た所が此所にも按摩が幾人も居て土地の人別になって此稼業を始めたんだ。(後略)

というようなことだった。彼の稼ぎは一日に4～5人位の客があつて、一人から20銭を得るという。それでも、かなりの蓄えがつくれたのは「此土地にやア金持の人が中々来るじゃ、二十銭と云つても五十銭も下ださる人もある、菊屋なんかのお客は中々どうしてお極りだけ措く人は少ない」というような事情のせいだったと語っている。

このようなエピソードを聞くと、すぐに古典落語の『孝行糖』<sup>38)</sup>を思い出さずにはいられない。

この落語の舞台は近世期の江戸、主人公は与太郎。テキストに明記されているわけではないが、彼には知的障害がある。この彼が親孝行だということで、町奉行から青緞五貫匁あおざしの褒美をもらう。このとき、奉行は「以後町役人五人組でいたわって面倒をみてやれ」と言った。だからというわけでもないが、長屋の住人が集まって「いただいた五貫匁あしのお錢、そのまんま与太に渡すと、ああいう奴のことだ、すぐに使ってしまう」から「いただいたこの五貫匁のお錢をもとに、与太郎が安楽に食っていけるような、小商いでも考えてやろう」と相談しあう。「与太郎にできそうな商売がありますか」と心配する者も出るが、当時、江戸で評判になっていた飴にあやかって飴売りをさせようということで、話はまとまる。親孝行がもとで褒美をもらって飴売りをするのだからというわけで「派手ななりをさせてね、きれいな頭巾をかぶせて、小箱へ飴を入れ、鐘と太鼓」の姿と衣装を定めて、飴は<孝行糖>と命名される。そして、与太郎の親孝行と町内の者の世話ぶりが評判になって、飴は大いに売れる。これで励みがついて、本人も大いにがんばるのだが、ある日のこと、トラ

ブルがおこる。近世期、武家屋敷の前での鳴り物は禁止されているのだが、このことを理解していなかった与太郎は、こともあろうに、江戸の街で最もきびしいといわれた水戸家の門前で、鳴り物をならして飴を売ろうとする。そこで、門番の六尺棒でめった打ちにされそうになる。そのとき、たまたまの通りがかりの人が「しばらく、しばらく、しばらくごかんべん願います。この方おろかしい者でございます。おろか者でございますが、いたって親孝行者でございます。先日、お奉行さまから親孝行のほうびとして、青緞五貫匁頂戴いたしました。町内の者たちが、かわいそうだということで、こんななりをさせて飴を売らせております」と仲裁してくれて、無事にことなきを得るのである。

近世期、自力ではどうにもできなくて、家族・身内の支えも得られないような障害者にとっては、これと言えるような施策は何もみあたらない。そうした状況のなかで、こうした困難な障害者を支えたのが、この『孝行糖』にみられるような地域社会の支援だったのであろう。現代のわれわれが『孝行糖』のような話に出会うと、たとえば、この主人公に対する「与太郎」というような言い方の差別性に目をうばわれがちであるが、近世社会の実情を考えると、ここにしめされた地域社会の支援のあり方の意義を忘れてはならないのである。

ここで、もう一度、さきほどの65歳の男性のエピソードにもどろう。このエピソードが発表された1913(大正2)年に65歳であったとすると、彼が失明した25歳の時というのは、まさに、幕末期にあたることになる。政治・社会情勢は混迷をきわめていた時ではあるが、地方の地域社会のなかでは、上述の『孝行糖』にあったような地域社会の支援がいまだ生きていたに違いない。また、彼のエピソードは、そのことを語っている。ところが、日清・日露戦争を経て日本の産業革命が達成される頃ともなると、こうしたことに変化のきざしがみえてくる。

1913(大正2)年に8歳で東京市養育院巢鴨分院に収容された少女の例を紹介しよう<sup>39)</sup>。この少女は新潟で生まれた。父はそば屋の店員。

38) 江国滋・大西信行・永井啓夫・矢野誠一・三田純一責任編集『古典落語大系』第一巻(1969, 三一書房) 41-48頁。

母は内職。彼女はこのような家庭に育つが4歳で失明する。このとき、母も死亡した。母の死亡で父は再婚するが、失明した少女は新潟市桶川町の叔母宅にあずけられる。その後、この娘はこの叔母の手で川合ムラという瞽女に託される。失明した女性が瞽女をめざすのは、近世期からのことであった。しかし、二年後に、川合ムラは「彼れが三味線に未熟なり」と判断して、この娘を父のもとにもどす。ここから先のことが、それまでの時代とはまったく違っている。というのは、娘をもどされた父は、再び、東京府下王子村の最上某に娘をあずけて姿を消してしまう。そして、この最上某にもすてられて、彼女は東京市養育院に収容された。

1918（大正7）年6月に東京市養育院に収容された34歳の女性の場合にはこうだった<sup>39)</sup>。高知県で暮らしていたが、彼女には右手と両足に生まれながらの障害があった。彼女が15歳のときに父が死亡したために、養子をむかえた。彼女に何がしかの資産があったとすれば、こうしたやり方もめずらしいことではなかったろう。だが、この結婚はうまくはいかなかった。三年後の18歳のときに離婚することになって、二人の子どもをかかえて暮らしに困ってしまう。その結果、

（前略）近隣に此の惨状を見聞するものはあっても如何にすれば良いかを示すものとはなかった、彼女は老いた母と愛すべき子女とを残して病氣治療の途やもあらんと空しき望みを持ちて遠く都に上らねばならなかった。

（後略）

というような事態になってしまった。このエピソードの紹介者が、

（前略）家に老母あり子女ある不具の婦人夫れが家貧うして家計に窮するにかく己れは不具の身の如何と為し得ざる悲運にありながら郷党の顧みる所ともならず、老母と愛児とを残し一家四散してあても無き東京に一縷の望

みを抱かしめたとは何たる事であらう。

と慨嘆するような事態にたちいたったのである。家族や地域の支援が期待しがたいものとなったとき、この障害をもつ女性が「病氣治療」に〈最後の期待〉をいだかざるを得なかったというのも、〈障害のない身体〉にしか意味を見いだせない時代の到来を暗示しているという意味で、まことに象徴的なことではあろう。

もう一つだけ、この頃の出来事を紹介しておこう。

（前略）こゝに去る6月1日麻布区役所から送院せられた十三になる少年が新潟県北蒲原郡乙村の生れで九歳の折脳を患ひて遂に啞者となった不幸児である、剰さへ父には八歳の時別れ母一人の手に辛うじて今日迄育てられたが今や母もこの不具児を我が家へ置くに堪えず因果を含めて遂に見放したのである、其後彼は何うして上京したかこの可憐なる少年は比較的伶俐にしてよく筆を手にする彼の記した所は実に下の如くである（原文の儘）

「ニイガタカラ、モライモライ、<sup>(ママ)</sup>ダンドン長岡ノオマチリヲミテカラナガをカデカネヲモラテカラ直江津イキ直江津カラタカサキイキタカサキカラカネヲタクサンタマタカラ上野<sup>(ママ)</sup>イキタ、ココマデキタ、バンザイ」何が万歳だ如何にかして東京迄行きたい行きたいと思つて居た様子が伺はれて惘然だ不具者を子供に持った親の心も同情に堪えぬが斯うした子供を構ふ者がなく唯一人放逐する恐ろしさを思はずには居られない。斯く不具な子供や手のかゝる人達を反つて不具故捨て、省みない例は少なくない、こゝに亦日本橋区から去る八日に送られてきた盲目の少女が居る、年は十四歳埼玉県の生れである、不幸は妙に重なるものか此少女も同じく幼より温き父母の懷から引き離され十一の時迄伯母の手に養はれて居たがこの年松戸町なる按摩を業とする或人の家に送られ辛苦の内に修業を積み漸やく少しく楽になれた事を喜び居た所昨年春師は遂に病没し、こゝにも亦居る事が出来なくなつた、途方にくれた彼女は止むなくもとの伯母に縋るより外はない、伯母も初め

39)「憐なる盲の幼女」(『九恵』151, 大正2年9月) 25頁。

40)「不具者郷党に顧みられず」(『九恵』208, 大正7年6月) 26頁。

の内は不憫に思つて養つてはくれたが月日が経つと初めの同情も何時しか薄らぎ遂に日本橋迄伴ひ出て彼を捨てたのである（後略）。

さきの『孝行糖』にみられたような地域社会の支援はもはや期待できず、経済力・介護力等をふくめた家族力の低いところでは、障害者たちを放出せざるをえない様子がはっきりと伝わってくる。それでも、たとえば、東京市養育院のような生活施設に収容された者は、そこで再出発の機会をつかむことができたのかもしれない。1915（大正4）年に視覚障害者25人が一度に東京市養育院に収容された。彼らは一人をのぞき、全員が中年世代であったという。その彼らも東京市養育院で生理・鍼灸を修めて、五人は自分で営業を開始し、なかには、五十円以上を貯金する者もできたという<sup>42)</sup>。たとえ、あんま業という生業の獲得によって経済的に自立できうとしても、そのための機会が公平ではなくなったということであろうし、いわゆる家族力に依存せざるをえない状況が広がっていったということではなかっただろうか。

資本主義の成立から産業革命をへることで、それまでの地域社会の支援ネットワークが解体にむかったことが第一の課題であったとするなら、第二の課題は、いわば近代の都市化社会の成立ということではなかっただろうか。

1935（昭和10）年7月22日、中央盲人福祉協会は盲人保護委員会を開いて、視覚障害者の旅行の付添人一人分の旅費を免除するように、鉄道大臣に対して陳情することを決定している<sup>43)</sup>。

このときの陳情書は三つの理由をあげている。第一は社会が「近時文化の進展に伴ひ交通の頻繁となるに従ひ盲人の一人歩きは益々困難となり旅行をなす場合には必ず附添人を要する所に<sup>マ</sup>有之候」というようなことになっており、第二は視覚障害者の経済水準が「先般大阪に於て実

施せられたる盲人生計調査の結果によれば平均一ヶ月四拾三円の収入にて一家族四人の生計を維持せる現状に有之候」という状況にあること、第三にはわが国の福祉水準が「本邦の現状を見るに盲人保護事業は旧時に於て他国に勝るもの有之候に拘らず近時全く保護の圏外に放置され居る状態にて洵に聖代の痛恨事と存候」というようなレベルにあることをあげている。

この陳情書で表明されている状況認識は、まことに象徴的である。第一には、それまでの社会のような小さな地域社会のなかだけでは、その生活と人生を全うしえなくなってきたということである。平安時代以来、杖だけを頼りに琵琶法師として全国をあるきまわって生業を獲得してきた歴史をもつかつての「盲人」たちが、近代社会となったいま、「盲人の一人歩きは益々困難」になってきたと表明しているのである。言ってみれば、「失明」という障害のために＜移動＞できないのではなくて、＜障害者＞が利用しがいのようなシステムが近代化のなかで確立していき、しかも、そのシステムがなくては社会生活自体が成り立ちえないようなことになってきたということではないだろうか。さらに言うなら視覚障害者の側のこのような困難の解消手段は、「附添人」による以外には解決されえないような時代状況ということも指摘されてよいかもしれない。

陳情書にある第二の状況認識の背後には、当時の専門家が「然るに近来の世相は、明者がこの鍼灸按摩マッサヂ術の学習に簡単で有利なるを知り、こゝに侵入して来るものが甚だ多い。東京、埼玉県マの如きでは、毎年の試験で五百人からの受験者のうち、僅に一割位が盲人で、他は明者であるといふのを見てもわかる。かくて盲人の唯一の職業は彼等に奪はれつゝある」、あるいは「以前には盲人は物が見えぬから、按摩をして貰ふのも、家のことがわからないでよいといふ考であり、且つ気の毒だといふ同情が深く且つ江戸時代よりの風習もあって、なるべく盲人に頼むといふ風があつたが、今は宿屋等に於ては勿論、故人のうちでも、手を引いてやつたり等せねばならぬことを非常に面倒がつて、な

41) 「啞少年と盲少女」(『九患』196, 大正6年6月) 30頁。

42) 「可憐なる盲目団」(『九患』174, 大正4年8月) 22頁。

43) 「盲人に鉄道奉仕を請願」(『社会事業彙報』昭和10年8月) 26-27頁。

るべく明者を頼むといふ風になって来た」,さらに「大病院に於ても、マッサーチは以前は盲人が主であったが、明者がこの業に携はる様になると、明者の方が都合がよい。ために、成るべく明者、又は視力の余程残ってゐる盲人を採用する傾向が著しい」などと指摘する<sup>44)</sup>ような事実があったことは間違いなからう。つまり、視覚障害者にとっても、＜障害の軽重＞によって、その＜社会的地位＞がはっきりと異なる社会がたちあらわれたということである。

鉄道大臣に対するこの陳情書がしめす第三の指摘は、幕藩体制下で、当道座中がそれなりに獲得していた＜自立＞への懐旧の思いの表明であろうが、現実には、現代社会が旧時に劣るようなことではこまるではないかと政府を叱咤激励しているといったところであろうか。

## 6. おわりに

障害の種類や形態・程度等によって違いはあろうが、障害者には確かに＜できない＞何かがある。そのことは否定するべくもない。だが、その＜できない＞何か、そのまま、彼・彼女の社会での可能性を奪うものでもないし、その市民としての尊厳がそこなわれるわけでもない。それは社会の側が障害のある彼・彼女をひとりの＜市民の仲間＞としてうけいれるために、どのような＜環境＞を用意するかにかかっている。たとえば、車イスの弁護士村田稔氏が「街のなかにある建物には、いたるところに階段があります。世の中の人びとのいままでの考えかたは、足の動かない私が階段のある建物に入るためには、まあ私のからだの状態を変えることによって、私が階段を自力で上がれるようにしようというものでした」「私の曲がった足を、手術によってまっすぐにし、その足に補装具をつけ、松葉杖にすがらせて一段また一段と階段を必死に上がらせようとするのは、まさにこの考えかたです。ところが私は、いくら補装具をつけ、松葉杖にすがっても、手すりがないかぎり、階

段を一步たりとも上がることはできません。それでもなお、私に階段を上がる努力をさせることは、私に不可能をしいることになります」と語ったうえで、「私はいま、社会の物理的な環境が変われば、障害者はもっと幸せになれると考えています」と宣言しているなかにはっきりとしめされている<sup>45)</sup>。

このような考え方は、障害者の側の誠実で懸命な生きる努力と、それをきちんと受けとめようとする社会と人びとの努力のなかで一步一步きずかれていくものであろう。しかしわが国の近現代社会にあっては、けっして多くはない社会事業家たちの手で少しずつ努力がかさねられてはいたが、全体としては、十五年戦争遂行という時代の趨勢のなかで、そうしたエネルギーは、たとえば「盲人の大多数は社会の最下級水準の下に生活することを余儀なくされ、一般社会は彼等に同情し扶助するよりも寧ろ侮蔑し冷笑し厄介視してゐる現状である。この不遇な同胞、盲人の精神的又は物質的生活を向上発展せしむる所の社会的施設の拡充の必要は論を俟たぬ所であるが茲に新たな問題として考慮されねばならぬ事は、今次事変を通して傷病兵中の失明軍人である。(中略)社会事業に関係を持つ者は勿論、銃後の国民各自が新なこの失明軍人に満腔の同情を寄すると共に、今後の生活戦線にその責任を分担せねばならぬ重大な問題と信ずるものである」<sup>46)</sup>といった形での＜軍人援護＞にすいとらていってしまう。そのようなわけで、戦前期にあっては、＜従軍＞のかなわぬ障害者たちに本格的な関心があつまることはなかった。

さきにしめした村田稔氏のような考え方がわが国に一般的に定着するのは、例の十五年戦争に敗戦したあとの、それなりの本格的な福祉施策への取り組みをへたあと、1981(昭和56)年の国連の＜国際障害者年＞の考え方と取り組みが導入されて以後のことになってしまう。

45) 村田稔『車イスから見た街』(岩波ジュニア新書、1994) 26・27頁。

46) 佐藤尚道「時局の社会事業への反影・盲人保護事業の私見」(『人道』57号、昭和13年2月15日) 7頁。

44) 川本宇之介「失明者の保護及職業的特権の確立」(『社会事業』15-7、昭和6年10月)。54頁。